

## 環境科学部の歴史に対する雑感

入江 俊一

生物資源管理学科

2001年3月某日、私は岩手県北上市の岩手生物工学研究センターの研究員を務めていた。しかし、実験に勤しむわけでもなく、宴会の打ち合わせをしていた。4月に退任する同僚達の送別会幹事長を仰せつけられたのだ。幹事長と仰々しい名称なのは岩手県の大面政治家の影響故か？会議は終盤にさしかかったところで中断された。滋賀県立大学環境科学部長(当時)の小池恒夫先生からの電話であった。受話器を取ると、「来月から環境科学部生物資源管理学科の助手としてご着任ください。」と用件を伝えられた。そういえば、半年ほど前に公募書類を送っていたのだった。私は幹事長を辞し、翌月、滋賀県立大学学長(当時)の西川幸治先生から辞令を拝命した。

環境科学部に初めて来て、右往左往する私に施設などの案内をしてくださったのは土壌学の大家である久馬一剛先生だった。私の恩師である栗原正章先生が旧知の仲である久馬先生にお願いをしてくださったのだ。今から思えば、よくも大先生に使い走りのようなまねをさせたものだと思う。「少々デザインが奇抜ですが、素晴らしい校舎ですね。」と私が感想を述べると、「中身はあなたがつくってください。」と久馬先生から返された。1995年に開学した滋賀県立大学は開学7年目となり、博士課程1回生が誕生したところであった。彼らは開学時の学部1回生でもある。環境科学部生物資源管理学科において、私は但見明俊先生、沢田裕一先生と同じグループとしてお世話になることになった。但見先生のご専門は植物病理学、沢田先生のご専門は害虫防除、私の専門は応用微生物学、他分野の方々から見れば近く見えるかもしれないが、実は所属学会からして距離がある。しかし、新任の助手が分野を変更することは珍しくない。やはり、今後のテーマを設定するために教授とよく相談を・・・と思った私に但見先生は「うちは大講座制です。自由にやってください。」とだけおっしゃった。確かに生物資源管理学科は大講座制であり、助手にも教授と同額の校費を配分するなど、研究においては教授から助手まで同等という雰囲気があった。しかし、余りに但見先生のご様子が素っ気なかったので、「ご自分をご多忙なので、助手の行動には興味が無いのだろうか？」などと当時は思ったが、何年も後になって但見先生から「多様な研究が存在する方が大学や学生にとって好ましい。それにより研究や教育に新たな展開も生まれるので

はないかと思う。だから、僕の分野とは関係が無い君に来て欲しかった。」と伝えられた。ご自身が助手である私の研究内容に干渉することをなるべく慎まれたのだ。滋賀県立大学は新しく、環境科学部は「環境」を冠する日本初めての学部として誕生した経緯がある。教員や学生には新しい大学・分野を作り出す気風が感じられた。勿論、それは現在でも引き継がれていることであるが、当時はより鮮明であった。私は、開学1年目の学生の博士課程時代しか知らないが、活動的で個性が強い者が多かったように思う。研究においては、教員から与えられたテーマをそのままなぞる学生は少なく、多くの者が(確固たる研究成果が得られるかどうかはともかくとして)自分の興味本位の研究を勝手に行っていた。研究以外のことにも熱心で、株で学費を稼ぐ者、楽器の練習をする者、博士取得と共に官僚を目指す者、個性豊かだった。ただ、当時の私にとっては、学生達の態度が余りに自由すぎるように感じられ、研究においては彼らを軽く論すようなこともあった。学生が能動的に研究を計画することは必須だが、計画に見込みがあるかどうか判断するための経験が彼らには無い。教員とよく話し合った上で、教員が設定した枠からはみ出ず、ひたすら実験を繰り返した方が効率的に研究成果が得られる。特に博士課程の学生にとって研究成果は直接的な将来の糧である。覚悟を持って集中しなくてどうするのか、という思いがあった。基本的に、今でもこの考えは正しいと思う。懇切丁寧に教員が導かねば戸惑う者も多い。しかし、学生達を遊ばせるための度量と、(かなり難しいことではあるが)学生達の思いつきをテーマに育てる能力の不足を棚に上げていたことは事実である。ある先生からこのような事を聞いた、「何が良い教育なのかについては学生の性質により千差万別で定義することが難しい。だが、入学したばかりの頃、学生は皆はつらつとしている。もし、これが消え、うつむいて卒業するようなことがあれば、それは失敗だ。」環境科学部の教員と学生との垣根はかなり低い。学生が自由に研究室の扉を叩いて多様な分野の研究者に質問できる雰囲気がある。開学から20年が過ぎ、学生達の気質も微妙に変化しているが、心地よい学生達の居場所を維持し、更にもり立てる努力が今後とも必要なのだろう。私も年齢だけは中堅となり、未熟さを若さと誤魔化すことができなくなった。諸先輩方に頼っ

てきたことについて取り組まねばならないのだろう。

再び時代を遡り、2007年は少し大学が変化したことを感じた年だった。人間探求学開講の時である。3代目となる曾我直弘学長が1回生からの少人数制教育として導入した。講義の担当者は全教員、ただし、内容の詳細は学科に任せるとのことだった。要は1回生の手綱を引けるようにしておくことが主目的らしい。学生を型にはめようとしすぎだ、高校ではあるまいに、と最初は思った。そもそも「人間」を探求する講義を受け持つ能力が私には無い。しかし、毎年講義を続けてみると、要はやりようだなと思うようになってきた。教えることが明確に設定されている講義ではない。私も最初はとにかく何か話さねばならないと考えて、世の中の出来事に対する持論をぶつことが多かった。さぞ学生達はうんざりしたことだろう。しだいに、学生に話をさせるように持つて行くようにしたほうが、より学生のことを理解できるし、教員との距離も縮まり、学生達も達成感が得られると思うようになってきた。人間探求学に限らず、曾我先生は大学を改革する使命感にあふれた方だった。私にも「最近の滋賀県立大学は昔に比べて良くなってきたでしょう。」とご自身の成果を尋ねるほどであった。昔もそれほど悪くなかったですよと言いたかったのだが、「いや、昔の方が良かった部分もあると思います。」などと返してしまい、大変失礼をしてしまったこともある。ご記憶なさっていないことを祈るばかりである。良い伝統を持つ滋賀県立大学と環境科学部であるが、やはり常に進歩が必要である。現学長の大田啓一先生も将来に向けた大学の体制作りにご尽力なさっている。この20年で3学科だった環境科学部も4学科体制となり、時代の変化に合わせる努力は続けられてきたのだが、次の世代を迎えるためには大きな体制変更が必要となるのだろう。一筋縄ではいかない話だろうが、一教員の立場から見守りたい。

もう一度、学生の気質の変化について触れておきたい。開学10年ぐらいまでの学生は、多かれ少なかれ環境科学部に所属していることを意識していたように思う。環境科学を学びたくて入学した者、偏差値などの関係で本学を選択したが気持ち新たに環境科学を学ぼうと決意した者、などである。しかし、近年、少なくとも私の周囲の学生で環境科学に特別な思いを持っている学生は少なくなってきた。多くの者は「私の偏差値で入学可能な滋賀県立大学環境科学部で〇〇(農学などの別分野)が学べるから入学しました。」などと言う。この20年で理学部、農学部は言うに及ばず、工学部、文系学部においても「環境」を大きく取り上げるようになり、大学にとって

「環境」は特別な言葉ではなくなった。その結果、受験生は「環境科学部」の大看板を無視して中身に注目するようになったのではないだろうか。ある意味、頼もしいと喜ぶべきであろうか。環境科学部に属する教員は、それぞれの分野の研究者である。教員個人に高度な専門性が求められ、またそうでなくては環境問題解決を目標として設定された学際分野の部分と成り得ない。しかし、「環境」が多くの分野に分散した現代において、もう一度、学部全体の未来を照らす強い指針を打ち出す努力が必要かもしれない。

さて、駄文を重ねることが辛くなってきたので、このあたりで筆を置きたいと思う。私自身、この20年(赴任してからは15年)を振り返ることで、少しだけ初心を思い出すことができた。何事も節目というものは大切だなと感じさせられる。機会を与えていただいた畑先生ならびに年報作成委員会の方々に感謝いたします。